Newsletter No.10

# アジア・ジェンダー文化学研究センター

Center for Gender and Women's Culture in Asia

奈良女子大学

発行 ■ 2011年3月31日
編集 ■ 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター
〒630-8506 奈良市北魚屋東町

アジア・ジェンダー文化学研究センター第10号　目次

●特別展示「着物にみる近代日本の戦争」 1
記念講演　乾淑子氏「着物にみる女こどもの戦争」 2
●公開講演会「家族―義務？それとも魅力的な商品なのか？」 4
●展覧会 6
「身体の記憶とテキスタイル」／アーティスト・トークセッション
●シンポジウム「女どうし／男どうし―文学に見る同性関係」 8
●講演会「絵の中の宮怨」 10
●公開講座「女子大学と女性論」 11
●シンポジウム「社会運動で語ること／伝わること／繋がること」 12
●公開研究会「マレーシアにおける女性の権利と宗教」 13
●調査研究「進路決定に関するアンケート」の副産物 14
●調査研究　奈良女子大学女性教員数　2011 15
●プロジェクト研究 16
「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査Ⅱ」報告
女子留学生概況／公開研究会／校史資料調査／留学生ヒアリング調査
●2010年年度のセンターの活動と編集後記 20

## センター特別展
# 「着物にみる近代日本の戦争」

### 8日間で3,000人が来場！

アジア・ジェンダー文化学研究センターでは、平成22年10月31日（日）から11月7日（日）の８日間、秋の重要文化財（旧奈良女子高等師範学校本館）の一般公開期間にあわせて、「着物にみる近代日本の戦争」と題する特別展を開催した。展示したのは、東海大学教授乾淑子氏が蒐集した明治から昭和にかけて作られた戦争柄の着物や帯、ハギレなどの130点である。

一般に女性や子どもの生活文化史が、歴史に書きとめられることは稀である。特別展は、戦争柄の着物の現物を展示することで、かつての日本に、男性のみならず女性や子どもも戦争のモチーフを消費した時代があったことを広く知ってもらおうと企画した。

展示は好評を博し、『奈良新聞』（10月28日）、『産経新聞』（11月1日）、ＮＨＫ奈良局ローカルニュースで紹介されたこともあって、期間中の来場者数は約3,000名にのぼった。参観者アンケートには、「着物柄に表象された、アジアにおける近代日本の戦争を通して、女性や子どもにとって戦争とは何だったのかを考えさせられた」という意見が多く寄せられ、センターに対しても、「今後もこうした他所ではなかなか見られない意義ある展示会を企画してほしい」という期待が寄せられた。

展示初日の10月31日（日）には、展示品の所有者で、戦争柄の着物研究の第一人者でもある乾淑子氏による記念講演が開催された。次頁で紹介する。

アジア・ジェンダー文化学研究センター主催

## 特別展示記念講演

# 乾 淑子氏「着物にみる女こどもの戦争」

奈良女子大学記念館講堂での講演風景（2010年10月31日）

講演の乾 淑子氏

### ■はじめに

今回の講演は、アジア・ジェンダー文化学センターの主催ということで、一般的に男のものと考えられている戦争を女やこどもといった違う視点から考えてみようというものです。とはいっても、やはり戦争柄の着物の概略を先に説明しておく必要があります。

### ■イメージとしての戦争柄

ここに展示した着物は日清・日露・第二次世界大戦というように時代順に並べてあります。

最初のケースの中の薄いブルーのハギレは、江戸縮緬の襦袢です。江戸縮緬は江戸期のものと思いがちですが、明治二十年代、日清戦争のころに流行ったものです。図柄は戦争の場面ですが、縮緬の下絵画家が実際の戦争に取材に出かけて行って描いたわけではなく、大体は錦絵をそのまま借りてきた図柄です。

錦絵が正確に戦争を写しているかというと決してそうではありません。明治の錦絵に関する研究者で、コレクターでもあった小西四郎氏によれば、日清戦争の時は400種類ぐらいの錦絵が出ていたそうです。これは画家が従軍して描いたものではなく、戦争の情景を想像して描いたものです。

どのように想像するのかと申しますと、日本には江戸時代からの錦絵の伝統があります。江戸時代は錦絵の図柄として平安末期、鎌倉、室町時代の戦争がたくさん描かれました。歌舞伎などの演目にもこれらの戦いはよく出てきますが、結局、実際の戦争ではなくイメージとしての戦争です。錦絵では、刀をこう振りかぶって、こう受けとめてという歌舞伎の一場面のようになるのです。それを鎧兜ではなく、近代の軍装にとりかえたものが、あの縮緬の図柄です。

会場には勲章、紙幣、軍票など変わったモチーフの図柄も展示していますが、これは大変レアなものでして、戦争柄の縮緬の90％は錦絵風に描いたものです。

### ■ 明治時代の戦争柄の着物

私は明治28年の『風俗画報』で、日清戦争のころには男性の羽裏（羽織の裏地）に戦争柄があったという記事を発見しましたが、実際のものは見たことはありませんでした。その後、二点を蒐集し、この会場にそのうちの一点を展示しています。

日清の羽裏の横に展示したのは日露戦争の時の羽裏です。日露戦争のころには広幅の羽裏が流行ってまいります。伝統的に日本の着物は布の幅を広くすることを考えません。西洋のタペストリーには６ｍから10ｍの幅のものがあり、17、18世紀のものでも相当広いのですが、日本では布の幅を広めたりはせず、大きいもの、たとえば布団皮のようなものでも着物と同じ並幅を接いで作りました。布団皮といえば最近では布団皮を皮製品と誤解する方もいらっしゃいますが（笑）。

ともあれ大胆な柄をきれいに出そうとすると、接いでない一枚の布の方がいいわけです。明治以降、男性用の大胆な図柄がたくさん出たこと、幅広の羽裏が登場したこと、このことは戦争柄の着物の発展と大きな関わりがあると思います。

明治の戦争柄の着物は、羽裏と襦袢です。羽裏は男性物ですが、襦袢の生地は明治には男物と女物の区別がはっきりしないことがあります。当時の戦争柄の襦袢は30円から40円、公務員の月給が20円ですから、到底買えません。明治時代の戦争柄は、有力な男性が着るか花柳界の女性が襦袢を着るかでした。

### ■ 大正時代の戦争柄の着物―男性から子どもへ

大正時代以降、子ども柄の戦争柄が出てきます。まず、大正時代には「ぼんち柄」（ぼんちとは坊ちゃんのこと）という子ども専用の柄が出てきます。これは大正デモクラシー時代の子ども文化の影響です。その子どもらしい、かわいらしいものの一部として、戦争柄が出てくるのです。おもちゃでも飛行機が西洋のハイカラもの

として登場し、近代の兵器がモダンで華やかなものとして描かれます。

戦争が吉祥で、子ども柄としてふさわしいというのは不思議に思われるかもしれませんが、考えてみれば現在でも五月五日には兜を飾り、これを戦争のモチーフだからと敬遠したりしません。実際、明治から昭和にかけて、七五三で陸軍大将の格好をした子どもの写真が多く残っています。健康を願い、立身出世の手段として、将校が人々の憧れの対象になったのです。

## ■ 昭和初期の戦争柄の着物 ― 子どもから女性へ

大正末期から昭和にかけては女物にも戦争柄が登場します。この時期、圧倒的に着物の消費量が増え、その一つとして戦争柄が出てくるのです。着たきり雀で戦争柄ということはありえません(笑)。女物の戦争柄の表着はごく少数で、ふつうは襦袢と帯が中心です。

もともと子供の表着と大人の襦袢と帯、この３つは同じ型紙を使いまわすことがあります。着物を注文するとき、図案帖をもとにして客はそれを好みの色や素材に変えるのです。私は子どもの表地を使いまわした結果として、戦争柄が子どもから女性へと広まったのではないかと考えています。

## ■ 日本のアジア侵略と戦争柄

戦争柄のモチーフもだんだん多彩なものになります。日清戦争のころの戦争柄の縮緬は錦絵が中心ですが、日露のときになると、デザインはアール・ヌーボー風の処理がされるようになり、オリーブ色が流行りました。オリーブは勝利の象徴、勝利の色ですね。

大正以降になると、飛行機や戦車のモチーフが入ってきます。日清・日露までは大掛かりな兵器は軍艦でしたが、第一次世界大戦後では、飛行機と戦車が取って代わります。しかも、ぼんち柄の飛行機や戦車は、非常に再現性が優れています。正確に描かれていて、専門家ならば兵器の型式を特定が可能です。男の子はこういうことに詳しいし、正確に描かれているほうが子どもに喜ばれたのでしょう。

なぜこうしたものが世に出たかというと、染織の方たちもお商売でして、売るためには他所にはない新しい、めずらしいものをというわけです。軍国主義が悪いということは頭にありません。少なくとも明治では戦争が国是であり、正義だったのです。そのうえこれは売れるというわけです。ただし、商業的ではあるけれども、結果としては戦争体制の遂行をサポートすることにつながったことは否めません。

さて、兵器以外にも、当時の戦争漫画のキャラクターをプリントしたものや三国同盟に関する図柄、戦勝を伝える映画スチールの図柄もあります。また軍歌の歌詞や楽譜を図柄にしたものもたくさんあります。軍歌は明治時代から存在しましたが、昭和10年代からは放送局や映画会社がタイアップする形で流行します。

「爆弾三勇士」、「肉弾三勇士」ものもあります。昭和７年の上海事変で敵地の鉄条網を爆破して死んだ三人の兵士について、『毎日新聞』は「爆弾三勇士」、『朝日』は「肉弾三勇士」と呼んで、これを讃えるキャンペーンを張ります。日本は満洲事変以降、戦争を拡大するにあたって、こういう英雄を必要としていました。明治ころにもてはやされたのは位の高い軍人でしたが、三勇士は庶民の出で、当時はお国のために死んでくれる一般兵士が必要とされたのです。

特殊な場面を描いたものでは、満洲国に関するものがあります。桃太郎や神功皇后も戦争のモチーフとしてよく登場します。桃太郎は鬼ヶ島に行って鬼を懲らしめて宝物をとってくるという、戦争を象徴する存在です。神功皇后はむかし朝鮮半島を征服した人で、日本の朝鮮支配を正当化するものとして描かれました。

それぞれの図柄の背景は奥が深く、研究に価します。

## ■ まとめ ― 非文字資料が伝える歴史

ただ、こういう戦争柄の着物は、正史つまり史(ふみ)に描かれた歴史として認められていません。冒頭で申しました錦絵研究の小西先生が、ご自身で錦絵を買わざるを得なかったように、私も戦争柄の着物を自分で買わざるをえなかったのです。今では小西先生の錦絵をまともな資料でないという人はいませんが、非文字資料が社会的に認知されるのは時間がかかります。

一方、美術の中では大芸術、小芸術という言い方があります。小芸術とは工芸品のことで、その中で日本で位が高いのはやきもので、西洋では金属器です。染織は寿命が短いためか西洋でも東洋でも一段低く見られています。つまり、あちらからもこちらからも、戦争柄の着物はまだその真価が認められていないのです。

それでも1年に１回ぐらいはこのような展示のお申し出があり、私はマンション住いで、ペットもいますので、こういう催しは虫干しにちょうどいいというわけで(笑)、このたびの展示となりました。年に１回とはいえみなさまに見ていただくのは大変ありがたいことです。虫干しの機会(笑)を与えてくださいましたセンターにお礼を申し上げます。　　(記録:野村鮎子)

乾淑子氏　略歴:
東海大学札幌校舎国際文化学部教授。研究分野は民族芸術、環境教育、染織など多岐にわたる。戦争柄の着物のコレクターでもあり、そのコレクションはNHKのETV特集「戦争を着た時代」(2009年６月)で紹介され、反響を呼んだ。著書に『図説　着物柄にみる戦争』(インパクト出版会)、『戦争のあるくらし』(水声社)がある。

公・開・講・演・会

# 家族―義務？ それとも魅力的な商品なのか？

日時：2010年3月23日　14：00～17：00　場所：奈良女子大学F棟5階会議室

家族、リプロダクション、生命倫理の研究者として著名なバーバラ・カッツ・ロスマン氏が、日本助産学会の招待講演で来日されたのを機に、本学で講演をしてもらった。ロスマン氏の翻訳書としては、『母性をつくりなおす』（広瀬洋子訳、勁草書房、1996年）が出版されているが、他の本はまだ邦訳されておらず残念である。ロスマン氏は90年代には妊娠・出産と生殖テクノロジーについて、社会学、生命倫理学の立場から精力的に書いておられたが、最近では養子や人種、遺伝といったテーマについての論文やエッセーが多くなっている(Weaving a Family: Untangling race and adoption, Beacon Press, 2005など)。以下、当日の講演の内容をおおまかに紹介したい。

## ■ 選択ということ

米国では資本主義の考え方が支配的で、全てに値段がつけられ、人々はその中から気に入ったものを自由に選ぶことを良いことと見なしている。アメリカは移民でできあがった国であり、人々はアメリカを自分で選んでやってきたということが、アメリカ社会を形作る基本になっている。したがって、自分で自由に選ぶことがアメリカ的であり、自己決定、選択の考え方が何事においても基本とされる。しかし、選択には危険な落とし穴がある。もし自分で選んだのならそれは自分の責任であり、選択の結果を受け入れなければならないからだ。米国ではこの理屈は、母になることやリプロダクション(生殖)にも適用されている。わたしは、この選択という考え方が米国で支配的となったために生じているさまざまな問題を、「中絶」「シングルマザー」「出産における医療管理」の3つのことがらについて紹介したいと思う。

## ■ 中絶を選ぶ

女性が中絶を自分の意思で「選べる」ようになることは、女性の地位の大きな変化だと見なされている。しかし、女性は中絶を選んでいるのだろうか。中絶を選びたくて喜んで選ぶ女性はいないだろう。女性はそれしかできないから、最悪の事態を避けるために仕方なく中絶を選んでいるのだ。たとえば最近の中絶は、必ずしも女性が子どもを産みたくないときになされているわけではない。近年の妊婦健診では、超音波診断で出生前の胎児の異常が詳しくわかるようになっている。その結果、女性は望んだ妊娠にもかかわらず、胎児の異常を治療することができない場合、妊娠中のスクリーニングに意味を持たせるためには、異常の排除つまり中絶を提示されるのである。そして、女性はスクリーニングを受けられていかに幸運だったか、最悪の事態を避けられて良かったかを強調され、充分に悲しむ余裕を与えられないでいる。女性が中絶を選択する状況はさまざまであり、望まない妊娠を早く終わらせるための中絶も、異常を抱えた胎児の出生を避けるための中絶もある。また中絶することで、女性が心から安堵できる場合もあれば、おなかの中の子どもを産めないことを悲しむ場合もある。中絶はどれも同じなのではなく、それが女性に力を与える場合もあれば、逆に女性から力を奪い取る場合もある。このように、中絶を考えたときにそれを女性の選択としてとらえるのは適切とは言えない。さらに中絶だけでなく生殖にまつわる選択の多くは(代理母や体外受精も)、女性が本当に「やりたくて」するのではなく、そうするしかないためにしていることに気づくべきである。

## ■ シングルマザーを選ぶ

1970年代に第二派フェミニズムが盛んな頃、私はジェンダーやセクシュアリティーの劇的な変革が起こりつつあると期待していた。しかしそれから40年たった現在、米国の家族にはそのような変革は起こらなかったことに気づく。一時期出産を控えたかのように思われた女性たちは、ただそれを引き延ばしていただけで、その後相変わらず伝統的な母親役割をとるようになっている。しかし、変わった点もある。それはシングルマザーが逸脱やかわいそうなことではなく、一つのごく普通の生き方になったことだ。女性は、男性と子育てを分かち合うよりも、自分一人で母になることを「選ぶ」ようになった。シングルマザーについて書かれた最近の本として、Ruth Sidel(2006)、Rosanna Hertz(2006)、Edin & Kefalas(2005)の3冊の本を紹介したい。Ruth Sidelの本には、アメリカのシングルマザーの悲惨な話がのっている。ホーソンの小説の『緋文字』に始まり、最近ではシングルマザーが福祉予算を使うことに対して、米国の歴代大統領たちは批判を繰り返してきた。Ruth Sidelの本に登場するのは、意図せずにシングルマザーになった女性たちと言える。それに対してRosanna Hertzの本は、積極的にシングルマザーを選んだ人た

ちに焦点を当てている。この女性たちは経済的に自立し、職業的には弁護士からウエイトレスまでさまざまな職業に就いているが、いずれも教育を受けたミドルクラスの女性たちだ。この2冊の本を読んで共感するのは、インタビューに答えたある女性が述べた「シングルマザーになるのはこれまでで最も難しいけれど、やりがいのあることだ」ということばだ。実は、私自身がSidelと同じように片親に育てられた。私の父は私が8才の時に亡くなり、Sidelは母親が小さいときに亡くなった。ところが興味深いのは、私の場合は父が亡くなって家からお金がなくなったのに対して、Sidelの場合はお金はあったが、家事手伝いの女性が雇われるようになったことだ。1950年代のこのできごとは、男性がお金を稼ぎ女性が家事を担うという当時の状況を端的に示しているが、驚くのはこの事態が現在に至るまでほとんど変わっていないことである。

しかし、結婚は大きく変わった。3冊目のEdin & Kefalasは、米国では「結婚からの逃避」現象がおこり、結婚の意味が大きく変わったと述べている。今では、人々は婚外の性交渉や同棲を容認するようになり、子どものために離婚を我慢すべきだとは言わなくなっている。結婚の持つ意味は、階級の違いを越え、豊かな層でも貧困な層でも大きく変わった。

## ■ 医療管理を選ぶ

生殖において医療を用いることは、米国では選択とすら考えられていない。なぜなら、医療は人が生まれてから死ぬまで当然用いるべきもので、選択するものとは考えられていないからだ。その意味で、医療は米国の国家宗教と言えるほど大きな力を持つようになっている。医学的ケアは妊娠から産褥に至るまであまねく行き渡り、かつ女性はその中で誰とどのような出産をしたいか選べると言われている。しかしその選択は、矛盾に満ちた産科医療の中で行われることになる。たとえば現在の米国では、出産は自然なできごとだと言われつつ、全ての出産にリスクがあると言われる。また病院は母乳育児を奨励しつつ、粉ミルク会社に産婦のリストを提供している。さらに出産は、女性が子どもを産むというよりも、医師が女性の身体から赤ん坊を取り出すことと見なされ、母体は赤ん坊の誕生を阻む障害物のように扱われることすらある。だが、本来胎児と女性は切り離すことのできない単位で、母親をサポートすることが最も確実に子どもをサポートすることにつながるはずである。現在の米国の産科医療は以前よりもずっと快適なものとなり、女性は自分に合った出産ができるという幻想を与えられているが、そこにあるのは高い麻酔分娩率、高い帝王切開率という医療介入に満ちた現実である。

米国には全国民をカバーする医療保険がなく、性教育も不十分で、避妊具や中絶を手に入れることも容易ではない。そのようなサポートがない中で、米国では子どもを産むのは選択で、中絶をするのも選択で、出産時の医療も選択だと言われる。このような環境の中で、女性たちは自分が望む形を手に入れるために過酷な戦いを強いられている。たしかに女性は産む時期を選び、経済的な自立を手に入れ、家族をかつてのような義務とは考えなくなった。しかし女性たちは相変わらず母親になることをやめていない。それは、母親であることが最もむずかしく、かつ報われることが大きい営みだからだろう。

以上のような講演の後、人間文化研究科の中川千帆准教授の通訳で質疑応答が行われた。質問の詳細はここでは省くが、質疑応答の中で出てきたいくつかの話題を紹介しておこう。ロスマン氏は、女性の中の二極化を重い問題だと指摘した。力のある女性は男性と同じように稼ぎ、かつ母親になる。そして貧しい女性をナニーやメイドとして雇い、育児を行わせる現状がある。また、シングルマザーには学歴が高く自立している人たちと、経済的に貧しく福祉を利用している人たちがいる。そして後者のような社会的に力のないシングルマザーに対して、社会は厳しい目を向けている。このような二極化と社会的弱者がバッシングされる状況に、ロスマン氏は批判的だった。また選択と自己決定について、氏はそれがコントロールのメカニズムであると述べた。なぜならば、人に何かをさせたいと思うときに、AとBのどちらがいいかと尋ね、あたかも選べるような錯覚を与えて、相手にそれをさせることができるからだ。そしてロスマン氏は、人種、階級、ジェンダーにおいて公平な力の配分が行われるような社会を実現しなければならないと述べた。

終了後のアンケートでは、「刺激的な講演会だった」「新しい視野が開ける講演に巡り会えて幸運でした」などのポジティブなコメントを得ることができた。

（記録：松岡悦子）

展覧会

# 「身体の記憶とテキスタイル —身体経験をまなざすこと／身体と向き合うこと—」 & アーティスト・トークセッション

Art

2010年7月8日から7月15日の8日間、本学記念館において展覧会「石垣陽子作品展　身体の記憶とテキスタイル～身体経験をまなざすこと／身体と向き合うこと～」を開催した。この展覧会は「ジェンダー論入門」の中でアートとジェンダーの問題を論ずる山崎明子（生活環境学部助教）の講義と連動したものとして位置づけている。

石垣の作品を選んだ理由として以下の点が挙げられる。第一にテキスタイルという素材とそのための技法を、「身体」をキーワードにしながら緻密に使い分け、自己の身体感覚の表現媒体として真摯にテキスタイルと向き合っていること。第二に、石垣自身がジェンダーという概念に特化してテーマ選択をしていないにもかかわらず、その作品群には近代以降のジェンダー規範を省察し得る多くの要素が点在し、石垣の作品と向き合うことにより鑑賞者が自己身体と向き合う意識を触発されること。第三に、特に現代日本の視覚文化状況において、石垣の作品群は文化史的文脈を転覆し得る可能性を有し、歴史・文化的知識の獲得を前提に観賞することによって、より深い作品解釈に挑めると判断できること。以上の理由から、女子大学におけるアートとジェンダーに関する問題を考える上で、適切かつ有効な作品であると判断した。

展覧会場

本展覧会の中では、石垣陽子が向き合おうとする自己の身体経験を多くの人たちと共有することで、身体経験をポジティブに読み替え、自己を肯定していくための大きな原動力にしていくことを目指した。

## アーティスト・トークセッション

日時:2010年7月9日(金)　10:40～12:10
場所:奈良女子大学記念館講堂
石垣陽子氏（アーティスト）
×
山崎明子（奈良女子大学助教）

トークセッション

**トークセッションは最初、山崎から石垣に質問を投げかけるかたちで進められた。（抜粋）**

山崎：「痛み」の表象が持つ意味は?

石垣：私は「痛み」を他者や自己に加える攻撃的なものではなく、自己の身体や問題を気づくためにあるものとポジティブにとらえている。痛みにより自分を知覚し自己の傷と向き合い、そして自身を誇る。そのために素材、形態、技法を吟味し「美しく」なるよう手をかけて、プラスのエネルギーをもって「怖い」を「美しい」に変換する。鑑賞者が「怖い」と感じるのは、鑑賞者自身の向き合う問題を見ていることも一つあるのではないか。

山崎：テキスタイルという媒体を選んだ理由は?

石垣：幼少時から、洋裁、手芸が好きな母の影響を

うけ、布で物を作ることは好きだった。京都市立芸術大学を受験するにあたり工芸を選択した際は強いこだわりはなかったが、漆工、陶芸、染織３つのコースから染織を選び、素材や技法と自己表現を考える中で次第に、染織、テキスタイルへの想いが深くなった。

**山崎**：何が表現の原動力なのか?

**石垣**：切実なものを作りたい。初期の作品「傷物」等は、自身のコンプレックスに取り組み、作品として昇華させるセラピーの要素が強かったと思う。現在は少しひき、作品制作は一生続く私の「業」として考えている。作品が自己の問題を超えて、他者と共有できるものになる瞬間、表現者としてこの上もない喜びがある。

**山崎**：女性であり、アーティストであることの意味は?

**石垣**：私はとてもストレートに作品制作をしている。身体感覚のテーマが多いが、身体の大きな特徴として「女性」であったことが「女性性」が大きな要素となる理由だろう。もし私が男性ならばきっと「男性性」をテーマとしていると思う。

**トークの後、会場にマイクを向けた。トークの内容や石垣作品への質問、感想など積極的な応答が展開された。（抜粋）**

質問：手袋は日常的な衣服ではないが、なぜ作品に手袋を使用するのか?

**石垣**：手は物を作り出すもの、触れて世界を感じるものであり、この部分だけでも人間を表現できる器官である。防寒、装飾などの用途だけではないことを示すために、作品タイトルに「手袋」ではなく「手・袋」英訳「hand-cover」と名付けている。「手・袋」各シリーズは、個々に「傷」「老い」「他者とのコミュニケーション」などのテーマを持ち、形態、素材、技法なども異なる。

質問：結婚、出産経験者として、《石物―ウェディング―マリアベール・リングピロー》が、胎児のようにも見え、結婚だけでなく次のステップ出産の意味を含むようにも見えたが作者の意図はどうか?

**石垣**：作品は、作者だけのものではなく鑑賞者のものでもある。作品を自分として自由に感じて欲しい。作者側も鑑賞者の意見から次の作品へ発想がつながり、作品　を深めることにもなる。

質問:ジェンダーというテーマだけでない作品もいくつかあるようだ。その点はどう考えるか?

**石垣・山崎**：「ウェットウェア」シリーズ、《手・袋Ⅱ》、《手・袋Ⅲ》などのシリーズ「女性性」だけではない作品も石垣は多く制作している。「女性性」というのは石垣作品の重要な要素の一つであるが他にも「身体性」や「素材」「技法」から新たな切り口で解釈も可能であると考える。作品を素材とし企画者の視点を鑑賞者に提示するという意味では展覧会も大きな作品であると考え、今回はジェンダーと言う切り口で展覧会を制作した。

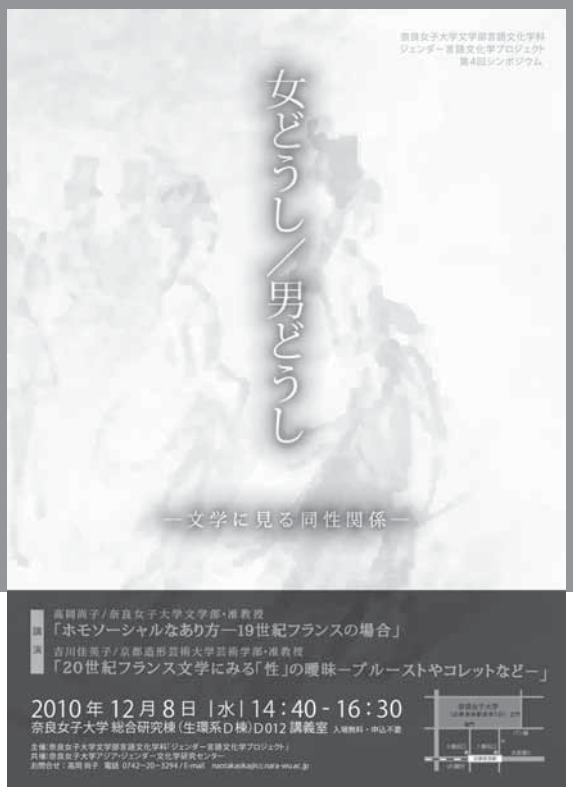
トークセッション会場

「美術」は長い歴史の中で作られた膨大な知の遺産である。単に「感じる」ことだけで理解が可能な作品ばかりではないことは言うまでもない。そのことは美術を専門としない学生たちにとってさらに顕著であり、人は見たことがないモノや知らないモノを十分に理解することは難しい。作品を見るために、またより積極的に作品と関わるためには、時に知識や、ジェンダー的な視点のみならぬ多くの分析視角が、その助けとなる。と同時に、切実に作品と向き合うことも必要だと思われる。

今回の展覧会で、多くの学生が視覚的に「痛み」を受け止め、切実に自己の経験や身体感覚に立脚し、感想（批評）を書いていた。少なくとも、この痛みや血肉の表現が、全く他者のものではなく、嫌悪感や拒絶感も含めて、自己の身体の記憶や感覚への想像力をジェンダーの問題と絡めて考える機会になったと思われる。これは作品との対話が自らの視覚経験に基づいていたことを物語っているのではないだろうか。

（記録：山崎明子）

# 共催シンポジウム
# 女どうし／男どうし
## ―文学に見る同性関係―




シンポジウムポスター

12月8日、文学部ジェンダー言語文化学プロジェクトとの共催で、シンポジウム「女どうし／男どうし―文学に見る同性関係」を開催した。

アジア・ジェンダー文化学研究センターでは、昨年度、文学部「ジェンダー言語文化学プロジェクト」との共催シンポジウムを試みた。結果はすこぶる良好で、ジェンダー言語文化学プロジェクト第３回シンポジウム「クィアと文学」は、多くの聴衆を得ることで、ジェンダー研究への期待と関心の高さを証明することになった。この結果を受け、今年度は「クィアと文学」という視点をさらに深化させ、テーマを「女どうし／男どうし―文学に見る同性関係」とした。

シンポジウムでは、本学文学部准教授で、センターの運営委員でもある高岡尚子が、19世紀フランスにおける男性同士の関係について概説したのち、吉川佳英子氏（京都造形芸術大学）に、「20世紀フランス文学にみる『性』の曖昧―プルーストやコレットなど」と題し、文学作品に描かれた同性愛関係について講演をしていただいた。

### 「ホモソーシャルなあり方―19世紀フランスの場合」

● 高岡尚子（奈良女子大学文学部・准教授）

昨年度のシンポジウムにおいて、中川千帆准教授（本学人間文化研究科）は氏の講演「クィアとはなにか」を、「ホモソーシャル」という概念の提示によって締めくくられた。今年度はその流れを継承し、高岡が「ホモソーシャル」の概念を詳細に解説し、実際に作品分析に応用する方法を示した。

「ホモソーシャル」は、イヴ・セジウィックがその著書『男同士の絆』で提唱した概念で、男性同士の間に発生する親密な社会的絆のことを指す。この絆は男性の間に強い連帯感を発生させるが、同時に、同性愛を嫌悪（ホモフォビア）させる。また、男性同士にとっての女性は、奪い合う、あるいは分け合う対象となり、彼女自身の主体的意志が考慮されることはない。

この「ホモソーシャル理論」を応用すると、バルザックの『アデュー』には、19世紀フランスにおけるジェンダーの不均衡が見事に示されていることがわかる。三部構成の『アデュー』は、視点人物となる二人の男性が、各部でそれぞれ、種類は違うが同じように親密な関係を育みながら、戦場の悲劇とその後を生きる物語だが、ここでは、最も過酷な運命を背負わされる女性からは声も理性も奪われているのである。

### 「20世紀フランス文学にみる『性』の曖昧 —プルーストやコレットなど」

● 吉川佳英子氏（京都造形芸術大学・准教授）

プルースト研究者の吉川佳英子氏は、特にジェンダーの視点に関心を寄せられ、『失われた時を求めて』に見られる性の問題や、同時代の女性作家コレットの作品などについて、幅広く論じられている。

氏はまず、プルーストやコレットが活躍した20世紀初頭のヨーロッパが、男性同性愛者に対して社会がいかに不寛容であったかを、オスカー・ワイルド裁判などを例に示された。次いで、プルーストの著作『失われた時を求めて』に描かれた、男女の同性愛者たちの様子を、詳細な引用を持って説明された。

性関係について保守的な時代に、このような内容の作品を発表したプルーストの姿勢は画期的であり、後の作家たちに多くの影響を与えたが、コレットはそれを賞賛する一方で、「ゴモラ」（女性同性愛者の世界）を描く姿勢には多少批判的であるという。プルーストが描く女性同性愛者の世界は、直接には語ることができない男性同性愛者の姿を仮託したものであり、隠れ蓑

としての機能は果たすが、実態を忠実に再現しているわけではない、というのがその理由である。では、自身がレズビアン傾向を持つコレットにとっての、女性同性愛者の本質とは何か。吉川氏はそれを、外界から遮断された二人だけの濃密な空間と「類似性」への希求であるとする。彼女らは他者としての男性を排除し、同質の相手との一体化というピュアな幻想を慈しむというのである。

「ソドム」（男性同性愛者の世界）の隠れ蓑として読まれてきたプルーストの「ゴモラ」であるが、昨今、エリザベス・ラデンソンらの研究者によって、別の解釈が示されている、というのが興味深い。「ゴモラ」のシーンをそれとして読めば、彼女らの、類似性を求め、純粋に女同士の愛情を分かち合おうとする姿こそが、「同性愛」の本質を満たしているのであり、「ゴモラ」は「ソドム」を上回っていると考えられるのである。

最後に、同性愛は「文学のよき主題」でありうるとの解説がなされた。秘密を抱え、苦悩する同性愛者を作中人物にすることで、小説が得るものは大きい。また、その作品には、動物的な欲望ではなく、男女という区別を明確には持たない植物的な感受性が多く見られるという。性関係についての葛藤を軽々と乗り越えるこのあり方は、同性愛の主題がもたらすダイナミズムを示すことになるだろう。

今回のシンポジウムでは、同性関係のさまざまなあり方という、まだ充分には研究が進んでいない分野を取り上げた。吉川氏には、プルーストというフランス文学の巨匠の作品に潜む、同性愛を機軸とした深く広大な世界の存在を示していただいたことで、参加者にも、このテーマの持つ可能性の大きさを感じてもらえたことと思う。今後もこのようなテーマを掘り起こし、共催活動として発信していきたい。

（記録：高岡尚子）

## ■ アジア・ジェンダー文化学研究センター講演会

# 「絵の中の宮怨 ――南宋の牟益「擣衣図」とその題跋」

講師：衣若芬（シンガポール・南洋理工大学副教授）
日時：2010年12月6日（月）14:40～16:10

擣衣図

衣若芬氏

講師の衣若芬氏は、唐宋文学、書画芸術、ジェンダーと文化、東アジアの漢文学および文化交流など、幅広い分野で活躍中の研究者である。今回は、「文学部ジェンダー言語文化学プロジェクト」との共催で、詩・絵画・題跋とジェンダーをめぐる講演をしていただいた。

南宋の牟益（1178～1242頃）の「擣衣図」は、南朝の詩人謝恵連（397～433）の「擣衣詩」を素材にして描かれた画巻である。「擣衣」とは、絹を杵で叩いて、柔らかく弾力性に富んだ布にする作業を指す。絹を置く台を砧（きぬた）といい、冬支度をする秋の夜には砧を打つ音が響き渡ったという。「男耕女織」というように、古来、衣装作りは女性の仕事であり、とりわけ、遠くに出征した夫を思いながら砧を打つ妻の姿は、しばしば詩の題材ともなった。秋の夜に砧の音を聴いた男性詩人たちは、砧を打つ女性の姿を想像し、女性の口ぶりをまねて、愁いをふくんだ幽遠なる女性の美を詩にしたのである。謝恵連の「擣衣詩」もその一つで、牟益は詩の内容に沿って、「女性の身支度のさま」「練（ねりぎぬ）を抱えて歩むさま」「砧を打つさま」「絹を裁って衣を縫うさま」「衣を箱に詰めて送るさま」の５つの場面を描いている。詩が聴覚（砧の音）を視覚化する過程であるならば、それを絵にすることは、その視覚的な美を具象化し、女性の哀愁を人々の前により顕かな形で示すことだと言える。

牟益の「擣衣図」には歴代の所蔵者による題跋（画巻に書きつけられた詩や文）がついている。「擣衣詩」の内容を踏襲して夫を待つ女性の哀しみを詠んだものもあれば、男は国のために身を奉げるべきであり女性への同情など不要とうたう詩もある。また、自身が太平の世に生まれ貴重な「擣衣図」を手にできた悦びを表現したものもある。

こういった多様な題跋の中でも注目に値するのが、清の乾隆帝による三度の題跋である。一度目は絵を入手した際のもので、謝恵連の詩に次韻した（同じ韻字を使った）詩を記しているが、その中身は詩の内容や絵に関することにかぎられる。ところが、二度目の題跋になると、悲哀に満ちた言葉が添えられている。これはちょうど孝賢皇后が亡くなった際に書かれたものであることによる。孝賢皇后は乾隆帝の最初の妻であり最愛のひとであった。16歳で嫁ぎ、乾隆十三（1748）年、37歳の若さで亡くなっている。

講演風景

三度目の題跋はそれから7年後のもので、孝賢皇后の短い一生に対する哀惜の念が綴られている。この日は、皇后の命日で、折しも寒食（冬至から105日目。この時期に墓参りをする習慣があった）の前日であったから、皇后を悼む気持ちが益々つのったのもうなずける。だが、皇后が偲ばれたのにはさらにもう一つの理由があった。皇后は古来、蚕神（養蚕の神）を祀る役割を担っていた。乾隆九（1744）年、清の開国以来はじめてこの祭礼をおこなったのが孝賢皇后であり、祭祀をおこなう「繭館」もまだ新しいのに主催者たる皇后の姿のないことが深い哀しみとともに思い起こされたのである。

衣若芬氏の講演は、絵や題跋のみならず、擣衣の実演映像や閨怨の情をうたった歌謡曲までをとりこんだバラエティーに富んだものであった。当日は、「ジェンダー言語文化学特殊研究Ｂ」の履修者を中心に50名近くの聴衆が集い、講演後の質疑応答では、皇帝や皇后による祭祀の内容、明代以降の擣衣詩の変容などさらに話題が広がった。「擣衣」や「養蚕」をめぐる風俗や芸術が、中国にとどまらず、日本や韓国を含む東アジア共有の文化として存在していたことも実感できた、濃密な90分であった。　（記録：大平幸代）

アジア・ジェンダー文化学研究センター共催

# 公開講座「女子大学と女性論」

日時：2010年12月11日（土）14:00〜17:00
場所：奈良女子大学文学部北棟1階　N101
主催：奈良女子大学生涯学習教育研究センター

田村　俶 氏

本田和子 氏

奈良女には、何種類もの公開講座がある。大学全体がバックアップする公開講座（定例）、各部局が主催する公開講座（定例）、各学科や各センター等が主催する公開講座（定例あるいは単発）などである。科研費の報告会（単発）等の研究発表会も公開講座的に開放されている場合があり、広い意味での公開講座は多数乱立し、分野や日時の調整を図ることは不可能に近い。この分類のうち、第一の公開講座、生涯学習教育研究センターが主催する講演会の、本年度第2回目について報告する。

講師には、本学の姉貴分、お茶の水女子大学（お茶大）の元学長、本田和子（ますこ）先生と、本学の元学長、田村俶先生をお招きした。両学長は、お茶大と奈良女を知り尽くした先生方である。本田先生は、お茶大のご卒業後、母校で長年、児童学の教鞭を取ってこられた。田村先生は京大大学院を出られて、すぐ奈良女に赴任、やはり長年、本学の教壇に立って、フランス文学、フランス語を教えてこられた。お二人とも各分野での碩学である。

公開講座の第1部では、両先生が最近ご関心を持っておられる研究テーマについて、ご講演いただいた。まず、田村先生から「青丹よし奈良の都は：地名詩歌の今昔」というテーマで、万葉集に歌われる地名と枕詞、その含意について、先生のご高説を伺った。次に、本田先生から「花盛りの少女文化と女学生の系譜」というテーマで、明治の女学生文化から、最近の少女マンガ文化、アニメ文化に至るご研究の一端をご披露いただいた。

第2部では、お二人の元学長から「国立」「女子大」の今後について、ご自身の長年の教官経験、学長経験を踏まえた、また大所高所からのご見解について伺った。本学の現学長、野口誠之先生や、お茶大同窓会（桜蔭会）大阪支部長、花房若葉さん他から、多数のコメントも頂戴でき、女子高等師範学校の伝統の上に、「国立」「女子大」が、社会をリードする女性を、如何に育ててゆくか考える良い機会になった。

なお、昨年度も、先の第1の分類に含まれる公開講座「女子大学と女性論」を開催したので、このことにも触れておきたい。ご講演は、金益見さん（神戸学院大学・講師）「女子大生がラブホテルを研究すること」、井上章一さん（国際日本文化研究センター教授）「『美人論』その後」である。若手女性研究者の金さんは、卒業論文から博士論文まで一貫してラブホテルを調査研究の対象にされ、ラブホテル研究書（文春新書）はベストセラーになった。生真面目かつ地味な研究テーマのみを良しとする本学の学風に風穴を空けていただくべく、熱弁を奮っていただいた。井上さんには、すでにベストセラーとなった『美人論』という歴史研究のご著書があり、今回は、その後の反響、フェミニズム陣営からの反応ほか、「美人」をめぐる現代的言説について、お話いただいた。昨年度のこの講座は、（興味本位の聴衆を増やさないため）対外的にはほとんど宣伝しなかったが、大盛会となった。

「女子大学と女性論」をめぐる本格的な議論は、お茶大と奈良女が抱える永遠のテーマである。大多数の私学の女子大学では、荷が重いかもしれない。今後も、このテーマが、本学で幾度となく扱われることを、昨年度、今年度の講座企画者としては、切に望みたい。

（記録：内田忠賢）

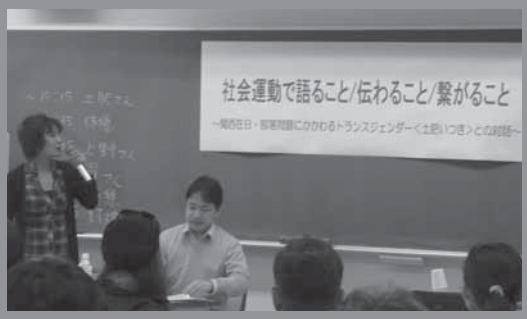
## 共催シンポジウム

# 社会運動で語ること／伝わること／繋がること

## ―在日部落とかかわるトランスジェンダー＜土肥いつき＞との対話―

2011年1月9日。センターと、人間文化研究科社会・地域学講座の共催を得て、＜関西の社会運動を考えるシンポジウム＞実行委員会（代表：鶴田幸恵、メンバー：栗岡幹英、野村鮎子、内田忠賢、以上奈良女子大学、渡辺克典、名古屋大学）が、シンポジウムを開催いたしました。登壇者には、京都府立高校で教員を務めながら、男性から女性へと性別を越境したトランスジェンダーである土肥いつきさん、難病を抱え、24時間介護をボランティアに託しながら、自立支援のNPOを運営する上野久美さん、沖縄文化や大阪の被差別部落、在日ブラジル人の学校や摂食障害のグループなど多彩なフィールドで調査を行い、差別問題に取り組む社会学者である岸政彦さんをお迎えいたしました。司会は、実行委員会メンバーの鶴田幸恵と、渡辺克典が務めました。

左から 岸さん　土肥さん　上野さん




左から 鶴田　渡辺

この企画は、鶴田が、十数年にわたり関東で性同一性障害やトランスジェンダーのフィールドで調査を行ってから奈良に赴任し、大阪・京都・そして奈良でも調査を始め、肌で感じた関西と関東との違いを、どうやって学術的に考えようか、というところからスタートしました。東京では、性同一性障害も、トランスジェンダーも、レズビアンやゲイというセクシュアルマイノリティでさえ、それぞれで活動し、接点があまりありません。しかし関西では、「いろいろな人が混ざっている」のが基本なだけでなく、在日韓国朝鮮人や、被差別部落出身者、障害者などが、ゆるやかに理解を示しあい尊重しあいながら運動を展開していく、という特徴を持っています。そして、それらのマイノリティの人びとが「人権」によって繋がり、互いについて学ぶ講演会などの機会も、数多くあることに驚きながら参加してきました。そのなかで、東京の講演会などで行われている講演とは違った話し方を、関西の話芸ととらえました。笑いやテンポを大事にする、その話芸を、どのように考えたらいいのか。それを考えるきっかけを作りたい、と思ったのです。それは、関西の運動家の、語り方、語りを聞くことによる伝わり方、さらに伝わることによる繋がり方を、運動家である「人びとの方法（論）」から捉えようとしようとすることでした。

まずは、基調講演として土肥さんに「『ありのままの私を生きる』ために――セクシュアリティをとおして自分自身と出会い直しませんか？」と題した、セクシュアリティ入門をかねた自分語りをしていただき、会場の方々にその話芸を実感していただきました。

次に、上野さんにも上野さんならではの話芸を披露していただきつつ、明るく生きていられることと障害受容について、また関西での運動の特徴だと思われる点について、考えていることを述べてもらいました。

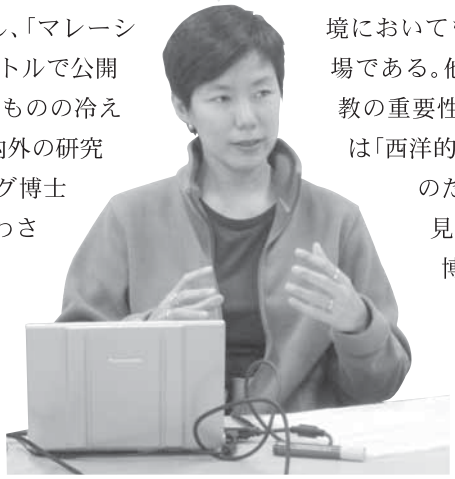
最後に岸さんには、関西の語りのなかの、「人に伝える」「人を繋げる」技術としての「ネタ」や「笑い」についてお話しいただきました。さらに、当事者側から見た、自分の人格を保つために必要とされるものとしての「ネタ」「笑い」、言い換えるなら、「ネタ」「笑い」として他人事にすることによって獲得されるものとしての当事者性について、お話を展開していただきました。

その後、会場からの質問に答えるかたちで、「笑い」と「しんどさ」の関係や「笑い」の功罪について、異なる当事者を繋げるための「メディア」／「装置」としての「人権」について、当事者として語るなかでの「受容／乖離」の関係について、など活発な議論が行われました。

今後、その具体的内容をまとめる研究をしていきたいと思っています。　（記録：鶴田幸恵）

## 公開研究会
# 「マレーシアにおける女性の権利と宗教」

講師：シャロン A. ボング（モナッシュ大学マレーシア校上級講師）　日時：2011年2月12日（土）14:00〜17:00



2011年2月12日、マレーシアのモナッシュ大学よりシャロン・ボング博士をお迎えし、「マレーシアの女性の人権と宗教」というタイトルで公開研究会が行われた。雪は降り止んだものの冷え込み厳しい2月の土曜の午後に、学内外の研究者や学生、15人程度が集まり、ボング博士の講演の後、活発な質疑応答が交わされた。

ボング博士の講演は、ご自身の幼少時の思い出と宗教的な背景がどのように女性の人権活動家として、そして研究者としての立場へと影響を与えているのかを明らかにする、親密かつ刺激的なものであった。マレーシアに中国系カトリックとして生まれ育ったボング博士は、中国系の家庭の男児優先の伝統が、彼女の信心するカトリックにおける男性優先の考えと変わらないものであると認識するようになる。女性の人権活動に従事し始めた彼女は、多文化・多宗教のマレーシアにおいて多くの女性たちが女性の人権を制限する宗教・文化に基づく思考形態から抜け出せないでいることに問題意識を抱き、全面的に宗教と文化を否定することなく、彼女たち、そしてその周りの男性たちに女性の人権を広く受け入れてもらう方法を試行錯誤することになった。ご著書ともなっている研究、『女性の権利と宗教の間の緊張：マレーシアの場合』では、宗教と文化を尊重しつつ女性の人権やHIVとAIDSに関わる活動を行っている活動家たちに、ボング博士がインタビューを行っている。その中から今回、ボング博士は、ムスリムの活動家たちがコーランの重視を基本姿勢として、イスラム教的文脈から女性の人権の推進活動をし、イスラム教的憐れみの心からHIV/AIDSとともに生きる人々を支援する活動を行っていることを紹介された。彼女、彼らには人権意識が信心と相反せずに同時に成立し、人権活動・HIV/AIDS啓発支援活動において双方を重視する戦略が効果的なものとして機能している、とボング博士は分析する。

ボング博士の講演においての一つの重要なポイントは、彼女の研究・活動の姿勢の説明である。女性の人権を推進する活動においては、大多数が「普遍主義」を採る。つまり、人権は文化や宗教の変数に影響されることのない普遍的な概念であり、女性の人権はどんな環境においても侵されるべきではないという立場である。他方、「文化相対主義」は、文化や宗教の重要性を強調し、普遍とされる概念も実は「西洋的」なものにすぎないと主張する。そのため、女性の人権活動の障害として見られることが多い。しかし、ボング博士は、「普遍主義」でもなく「文化相対主義」でもない、その間を採る「批判的相対主義」の姿勢を主張する。それはボング博士が取材した活動家たちが信心を大切にしながら女性の人権を促進することに成功していることからもわかるように、宗教や文化の影響を強く受けながら生きる女性・男性の現実のなかで女性の権利を実現していく道を探ることを意味する。

講演の後、参加者からはマレーシアの政治的・宗教的状況に対する質問が相次いだ。ボング博士の回答は、法律・政治・教育の面で、特にイスラム教信者の女性たちが権利や自由を制限されていることを明らかにするものであり、宗教・文化の影響を否定しがたい環境のなかで、それらと女性の権利が相反することなく受け入れられる道を探ることがいかに重要なことかより一層実感されることとなった。多文化・多宗教のマレーシアという、日本とは大変違う背景を持つ国を舞台にする研究・活動の話ではあったが、同じく非西洋の国として、女性の権利を推進する上で普遍主義・西洋中心主義に陥らずに「文化相対主義」の主張にどう対応していくか、という重要なヒントが得られる公開研究会であったと言えるのではないだろうか。　（記録：中川千帆）

# 「進路決定に関するアンケート」の副産物

松岡由貴

2007年度から2010年度まで、4年間にわたり、本学2回生を対象に行ってきた「進路決定に関するアンケート」では、実際に選択した進路と、選択に及ぼした要因について主に調査してきたが、“現在、科学技術にどの程度関心を持ち、必要と思っているか”についても調査を行ってきた。これは、進路選択した分野と、興味を示す科学技術関係のキーワードとの相関をみることが目的であった。

集計結果には、予想通り、分野によって「必要だと思う科学技術知識」の項目に差異が見られたのだが、ここで想定外の“副産物”と言える結果が出てきた。

まずは昨年のニュースレターで報告した通り、全14項目の内、1人当たりが「必要」にチェックを入れた項目の平均数を調べてみると、理学部・生活環境学部よりも文学部の方が個数が多い傾向がみられたことである。もう一つは、経年変化をみると1人当たりの平均数に減少の傾向がみられる、ということである。(表1)

表1　「必要だと思う科学技術の知識」1人当たりの平均チェック数

| | 2007年度 | 2008年度 | 2009年度 | 2010年度 |
|---|---|---|---|---|
| 全　学 | 6.1 | 5.9 | 6.5 | 5.8 |
| 理　学　部 | 6.1 | 6.0 | 6.7 | 5.8 |
| 文　学　部 | 6.6 | 5.8 | 6.6 | 6.3 |
| 生活環境学部 | 6.0 | 6.0 | 6.1 | 5.4 |

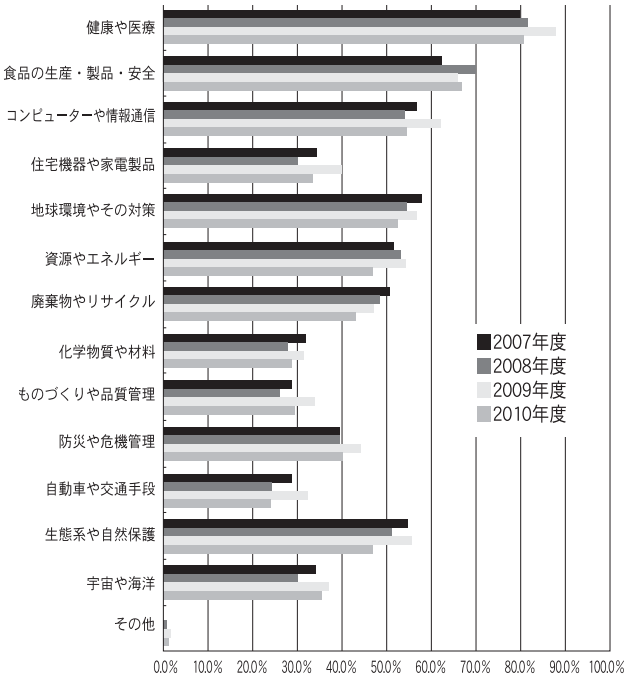
地球温暖化や食品の偽造・期限切れ問題などネガティブなニュースばかりではなく、ここ1年ではノーベル賞受賞やはやぶさの地球帰還など、ポジティブなニュースもあった。そのためか、2009年度の調査では少し盛り返してはいるのだが、長期的には減少するものと予想される。この理由は、今回行ったアンケートから直接知ることは出来ないが、日々学生と接している中で思い当たる節がある。

刺激的なニュースや美しい映像に労せずして触れ、自ら試行錯誤して経験する機会が激減している、ということである。ノーベル賞受賞や、はやぶさのような大きなイベントは毎年起こるわけではない。その瞬間はニュースやネットで流される映像に影響を受けたとしても、自分で努力して得た知識や結果とは違うので、次第に忘れ去り、新たに世間を騒がせる別の話題へと興味を移してしまう。

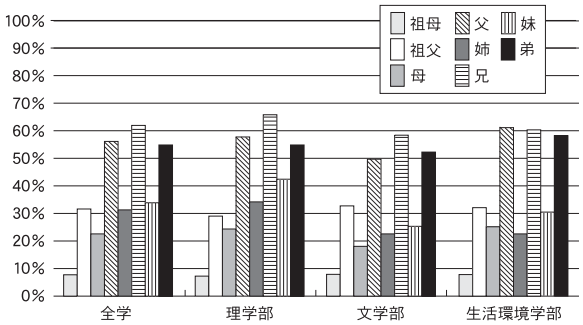
親や学校の先生など、周囲の人から「女の子は文系」などと偏った考えを擦り込まれる度合いは年々減ってきているはずで、国をあげての女子生徒・女子学生を対象にした「理系の裾野拡大」支援策も継続して行われている。しかし、当事者である女子生徒・女子学生が、科学技術の知識を持つ重要さを実感する機会を持たず、科学に対する興味を失い、無関心になりつつあるのでは、いくら周り(大人)が理系を勧めても、効果は低くなるだけだろう。

「家族の理系率」の調査では、理系に進んだ学生には、母、姉、妹といった同性の家族の理系率が高かった。また、理学部数学科や物理科学科など、“理系色が濃い”と考えられる分野では、理系の姉や兄がいる率が高かった。

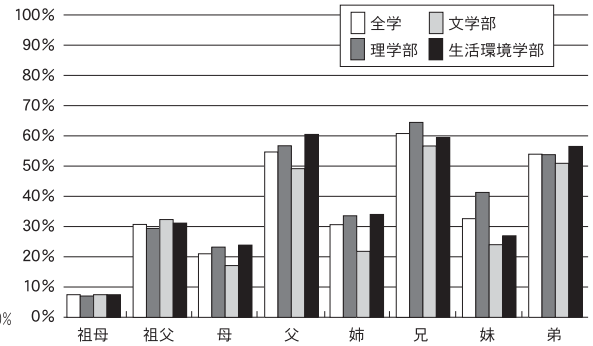
アンケートの記述欄では、「学校の先生に勧められて進路決定した」との回答も多くみられたが、家族の理系率の分布をみると、やはり日々接する時間も長く、考え方も(一般的には)近い家族の影響が大きく、選択分野の“理系色が濃く”なればなるほど、より身近な姉・兄の影響が大きくなるものと考えられる。




必要だと思う科学技術　全学　2007～2010年度総計




学部別　家族の理系率　2007～2010年度総計




家族の理系率　学部別　2007～2010年度総計

# 奈良女子大学 女性教員数 2011

安田恵子

アジア・ジェンダー文化学研究センターでは、これまで本学における女性教員数について調査してきた。今回は2011年1月末現在の女性教員数について報告する(図1・表1)。

本学の教員数は197名、女性教員数は58名29.4%で2007年から緩やかな上昇傾向を示している。文学部では1993年には15.8%であった女性教員比率が年々上昇し2011年には28.4%になっている。理学部では1993年には23.2%あった女性教員比率が減少し20%以下に低迷していたが、今年度は20.0%に上昇した。生活環境学部では変動はあるもの1993年から一貫して40%以上の高い女性教員比率を示している。昨年度の女性教員数は全学で27.5%であり、今年度は2%ほどの上昇になった。教員採用数に目を向けると女性の採用は今年度は78.6%、昨年度は44%で、今年度は積極的に女性を採用したことがわかる。

残念ながら、職務別にみると女性の教授は全教授の19.3%で、職階が下になるほど割合が高くなり、講師・助教では約80%で、男性教員とは対照的である。全国的に女性教員数を増加させる試みが行われているが、女性研究者の育成や女性の働きやすい環境づくりも今後の課題であると考える。

表1　奈良女子大学における女性教員数・男性教員数

2011.1.31現在

| 文　学　部 | | |
|---|---|---|
| 学　科 | 女性教員数 | 男性教員数 |
| 人文社会学科 | 4（16.0%） | 21（84.0%） |
| 言語社会学科 | 9（39.1%） | 14（60.9%） |
| 人間科学科 | 6（31.6%） | 13（68.4%） |
| | 19（28.4%） | 48（71.6%） |

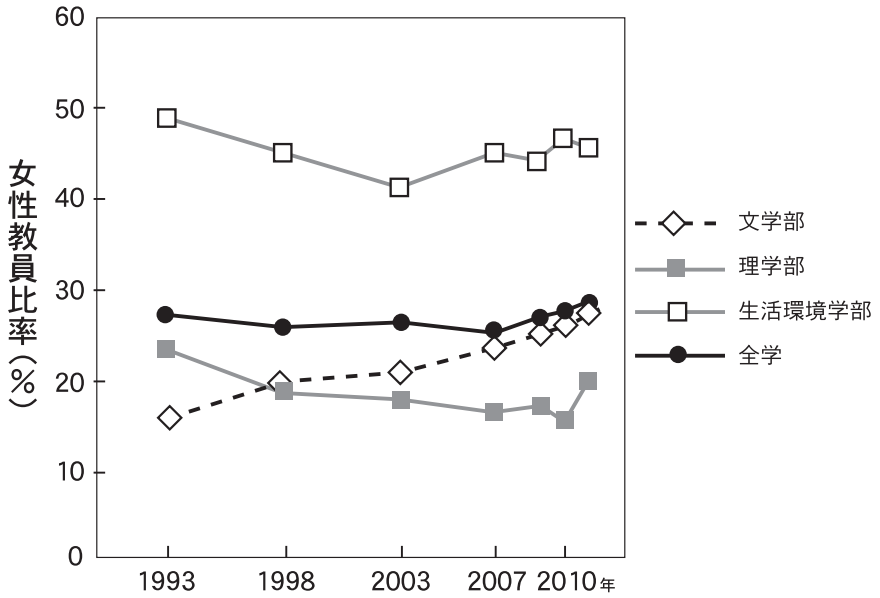
| 理　学　部 | | |
|---|---|---|
| 学　科 | 女性教員数 | 男性教員数 |
| 数　学　科 | 4（33.3%） | 8（66.7%） |
| 物理科学科 | 3（15.8%） | 16（84.2%） |
| 化　学　科 | 2（11.8%） | 15（88.2%） |
| 生物科学科 | 3（17.6%） | 14（82.4%） |
| 情報科学科 | 4（26.7%） | 11（73.3%） |
| | 16（20.0%） | 64（80.0%） |

| 生活環境学部 | | |
|---|---|---|
| 学　科 | 女性教員数 | 男性教員数 |
| 食物栄養学科 | 7（53.8%） | 6（46.2%） |
| 生活健康・衣環境学科 | 5（35.7%） | 9（64.3%） |
| 住環境学科 | 6（46.2%） | 7（53.8%） |
| 生活文化学科 | 5（50.0%） | 5（50.0%） |
| | 23（46.0%） | 27（54.0%） |

全学教員数 197
女性教員数　58（29.4%）
男性教員数　139（70.6%）

※教員は学部に所属する教授、准教授、講師、助教とした。

図1　奈良女子大学における女性教員比率の推移



## プロジェクト研究

# 「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査Ⅱ」報告

「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査Ⅱ」は、平成21年度から5ヵ年計画でスタートした本センターの重点プロジェクトであり、女性のキャリア形成の視点から、本学に留学した学生たちが帰国後にどのような職につき、どのようにキャリアを形成し、どのような人生を歩んだのかについての調査を行うものである。

研究は、校史資料（留学生関連資料）調査、帰国留学生へのヒヤリング調査、およびセンター員の研修と調査報告を兼ねた公開研究会の3部門から構成される。

本学には戦前の奈良女高師時代から留学生教育に携わってきた歴史がある。そのため本年度の調査報告にあたって、まずは近代日本における女子留学生と奈良女高師の留学生受け入れ概況について説明しておく。

### ＜近代日本における女子留学生概況＞

20世紀初頭、中国・朝鮮・台湾をはじめとするアジアの国々から多くの女子留学生が日本へとやってきた。彼女たちの多くは中上流階級の知識人女性で、近代化の進む日本で西洋思想や科学技術を学び、それを持ち帰ることで祖国の文化発展を目指したのである。

女子留学生の多くは東京の女子専門学校で医学、薬学、音楽、美術などの専門技能を学んだが、1910年代～20年代に留学教育が整備され、官費支給の制度が整うと、官費が支給された東京女子高等師範学校（現：お茶の水女子大学）、奈良女子高等師範学校（現：奈良女子大学）に多くの留学生が集まることとなった。これら二校の女高師は、とくに当時日本の植民地であった朝鮮や台湾の留学生にとっては「女子の最高学府」として憧れの的となった。また1932年に「満洲国」が成立すると、国家建設の人材育成を目的として多くの留学生が日本に送り出された。

その一方、日本によるアジアに対する侵略政策のなかで、留学生の多くは祖国と日本との間で板挟みとなる複雑な状況に置かれたのである。

女子留学生たちは帰国後、特に教育の分野で著しい活躍をみせた。なかには女学校の校長となる者も現れ、祖国の女性の知識の向上を目指して努力した。医学や科学技術などの専門分野にも、最新の知識や技術をもたらした。その一方で、戦後の政治状況や国際関係によって、彼女たちはかつての敵国であった日本へ留学したという経歴を隠さねばならなくなったのである。

### ＜奈良女子高等師範学校の留学生について＞

奈良女高師の留学生についての研究は、まず『奈良女子大学60年史』（1970）においてその概況がまとめられている。また中塚明氏は「奈良女子高等師範学校の中国人・朝鮮人留学生」（『アジア女性交流史研究』9　1971）でこのテーマをさらに詳しく論じている。中国人留学生については、周一川氏の『中国人女性の日本留学史研究』（国書刊行会2000）により詳しい研究がある。これらにより、以下のことが明らかになっている。

奈良女高師創立の翌1910年、初の留学生として5名の清国人留学生が聴講生として入学した。だが1911年に辛亥革命が起こると全員帰国し、退学してしまう。その後1922年に朝鮮人学生が1名聴講生として入学すると、朝鮮人の入学が連年相次ぐようになる。

1925年になると特設予科が設けられ、奈良女高師に入学を希望する中国人の女子に対して１年間の予備教育が施されるようになった。この制度によって中国人留学生も多く集まるようになった。特設予科を修了した中国人学生は奈良女高師の本科に入学が許可されたため、それと同時に朝鮮と台湾からの留学生も、聴講生としてではなく本科生として入学する道が開かれた。1952年に奈良女高師が廃止されるまで、同校に在籍した留学生は予科も含めて200名以上にのぼった。

奈良女高師の留学生教育の特色は、ひとつは全寮制であったことだ。女子留学生のほとんどが東京に集中していたにもかかわらず、奈良女高師に多くの留学生が集まったのも、寄宿舎が完備されていたことが大きい。留学生は寄宿舎での生活で日本人学生と交流することができ、また独立生活の能力が訓練されたという。

もうひとつの特色は、「満洲国」の留学生を数多く受け入れたことだ。同じ女高師でも、東京女高師は教員不足を理由に「満洲国」留学生の受け入れを断わることが多かったのに対し、奈良女高師は積極的に受け入れ、本科の在籍総数は30余名であった。これは女学校の中では東京女子医学専門学校の60余名に次ぐ数であった。

（羽田朝子）

本センターでは以上の研究成果をもとに、奈良女高師の留学生の実態や帰国後の状況をさらに掘り下げるべく、系統的な調査（公開研究会・校史資料調査・ヒアリング調査）を行っている。これを次頁から紹介する。

## 公開研究会

プロジェクト研究

### ●第一回　「満洲国」女子留学生と奈良女高師

日時：2010年7月23日（金）15：00～17：00
講師：周一川氏（日本大学准教授）

講師の周一川氏には、日本に留学した中国人女性についての詳細な著書『中国人女性の日本留学史研究』（国書刊行会、2000年）がある。周氏はこの著書のなかで、奈良女高師は特に「満洲国」からの留学生を数多く受け入れていたことを指摘している。

講演ではまず、「満洲国」の学校制度や留学政策など、当時の留学生をめぐる概況が示された。1931年に満洲事変が起こると、中国東北部のほとんどの学校は閉校となり、「満洲国」建国後はそれまでの三民主義や反日教育を排除する形で、学校教育が再開された。だが女性を受け入れる高等教育機関が少なく、中華民国の学校への進学も困難であったことから、より高度な知識を求めた女性の多くは、日本留学という道を選択した。1935年から38年にかけて、徐々に日本留学の制度が整備され、毎年50名の女子留学生を日本へ派遣する方針も定められた。1939年には東京牛込に女子留学生会館が建設され、集団で来日した女子学生たちは、しばらくの間ここに滞在した後、各地の学校へと向かっていった。「満洲国」からの女子留学生が最も多かったのは、1941年の206人で、その後、戦争の激化とともに少しずつ減少している。女子留学生たちが日本で学んだのは、医学、師範、家政など専門性の強い分野で、帰国後は医者や教員になる女性が多かった。当時、「満洲国」では教員が不足していたため、政府は師範学校への留学を重点的に進めていた。1930年代から40年代前半にかけ、奈良女高師には10数名から多いときには30名以上が在籍しており、そのほとんどが官費留学生であった。

周氏は奈良女高師で学んだ元留学生たちへのインタビューをもとに、以下のことを明らかにした。留学生の多くは、帰国後に教員となって、祖国の教育の発展に貢献した。なかには中国の化学研究をリードした女性や、台湾で政治家となった女性もいる。「満洲国」留学生が日本で学んだ期間はまた、戦争のいちばん激しい時期でもあった。奈良女高師を卒業した後に、進学先の広島文理科大学で被爆死したり、空襲で亡くなった女性もいた。彼女たちはさまざまな形で戦争に巻き込まれた被害者でもあった。　（記録：杉本史子）

### ●第二回　台湾帰国女子留学生の「満洲」経験

日時：2010年10月31日（日）16：30～18：00
講師：游鑑明氏（台湾中央研究院近代史研究所研究員）

講師の游鑑明氏が所属する中央研究院では、日本統治期に「満洲国」に移住した台湾人にインタビューを行い、その成果として『オーラルヒストリー〔原題：口述歴史〕』第5期（1994年）と『日本統治時期における「満洲」の台湾人〔原題：日治時期在「満洲」的台湾人〕』（2002年）を出版している。本講演では、游氏がこれらに掲載された10名の台湾女性たちの口述記録を用い、彼女たちの「満洲国」経験を紹介した。

まず口述記録の対象となった台湾女性たちは、その多くが高等教育を受けた知識女性であった。彼女たちの多くは結婚後に夫の任地に随行し「満洲国」へと移住したのである。その中には日本留学経験を持つ者もおり、うち1名は奈良女高師の卒業生である。

南国の地に育った彼女たちにとって、「満洲国」の厳しい冬は辛いものであった。彼女たちは寒さを防ぐための術を学び、石炭や防寒着の使用法を身につけた。その他、食文化や年中行事の過ごしかたについても適応をせまられたという。

台湾女性は慣れない「満洲国」の風土や習慣の中で生活するために、台湾人だけでなく「満洲国」の中国人や日本人、朝鮮人たちと様々な形の人間関係を構築した。時に台湾人を「日本人」と見なす中国人から敵視されることもあったが、それでも多くの台湾女性が「満洲国」の人々と友情を築くことができたのだ。

オーラルヒストリーを分析対象とする場合に注意すべきは、インタビュアーの質問内容や、インタビュイーの記憶や表現能力に限界があることだ。しかし個々の女性の口述に耳を傾けることにより、資料には残らない当時の情報を得ることができ、歴史の真相を探るうえで大きな助けとなるのだ。　（記録：羽田朝子）

### ●第三回

日時：2011年1月28日（金）14：40～17：00
Ⅰ部　野村鮎子（奈良女子大学文学部教授、センター長）
「H22年度帰国留学生ヒヤリング調査報告」
▶詳細は「留学生ヒアリング調査」（19頁）を参照
Ⅱ部　羽田朝子（センター助教）
「奈良女高師留学生の卒業後の進学状況について」
▶詳細は「校史資料調査」（18頁）を参照

## 校史資料調査

プロジェクト研究

今年度から本センターでは奈良女子大学に所蔵されている女高師時代の校史資料について調査を行い、留学生についての資料を蒐集・整理した。調査にあたったのは杉本史子（立命館大学非常勤講師）・磯部香（本学博士研究員）・羽田朝子（センター助教）の3名である。校史資料は膨大な量におよぶため、調査は今後も継続する必要があるが、本号では22年度までの成果を報告する。

●**「奈良女高師の卒業者学籍簿」**を整理することにより、先行研究では諸説あった本科の卒業留学生数を確定した。その数は朝鮮人44名、中国（中華民国）人29名、満洲国人25名、台湾人3名の計101名である。このうち朝鮮人4名、満洲国人1名の卒業生は、先行研究で遺漏されており、今回の調査で新しく発見した。

●**「文理科大学等志願者に関する調査」**をもとに、留学生の本科卒業後の進学状況について整理した。1929年に東京と広島に文理科大学が設置されると、奈良女高師を卒業した留学生も入学を希望するようになり、東京と広島へそれぞれ2名と7名が進学している。進学を希望する留学生は中華民国出身の学生が多く、二校の文理科大のほか九州帝大、大阪帝大、東京帝大に聴講生や研究生として在籍する者もあった。それは彼女たちが女高師を卒業することで得られる教員免許状が留学の目的ではなく、さらなる専門知識を得ることを求めていたからだと考えられる。

●**「会議録」の成績会議**の記録には、問題とされた留学生の記述が書き留められている。そこには今から考えると中国や朝鮮半島に対する蔑視と思われる発言も残されている。一方、留学生たちのささやかな抵抗も見て取れる。日本の道徳を押し付けようとする修身の授業では熱心さを欠き、また日本独特の鍛錬法である薙刀の授業を取りやめる学生も多かった。興味深いのは、園芸の成績が総じて芳しくないことである。母国で中上流階層に属した留学生にとって、園芸は土いじりをさせられる、苦痛な時間でしかなかったようだ。

●**「会議録」の教官会議録**からは、留学生の個人的な動向だけでなく、留学生に共通した傾向や、時代の影響も読み取れる。日中戦争が始まり思想面での取締りが厳しくなると、留学生にも日本の国体を押し付けようとする傾向が強まった。1937年には日本へ戻る途中、朝鮮人留学生が所持していた本を特高から「不穏なる書物」として取り上げられるという一場面もあった。

●**「特設予科修学旅行に関する書類」**からは特設予科で年に1～2回の修学旅行が企画されていたことがわかる。戦争が激しくなっていく1938年からは、「満洲国や中国からの留学生に日本の歴史や精神を理解させるため」といった目的が掲げられるようになった。さらに行程には明治天皇が葬られている桃山御陵や乃木神社への参拝が組み込まれた。ただしその旅行中、留学生が抑圧され苦痛を感じるばかりだったとはいえない。留学生の手による旅行記からは、彼女たちが旅行先で日本の風物を興味深く参観し、その背景にある歴史文化を主体的に理解しようとする姿も窺うことができる。

●**「満洲国留学生関係書類」**の駐日満洲国大使館からの下達公文書の中で特筆すべきは、年に一回以上の「留日学生現況調査」を行なっていることである。その調査は年齢、本籍、在籍学科、学年、卒業予定、学費（官費の額）、出身学校にまでわたった。時には大使館から人員を派遣し、彼等に女子留学生の動向を直接調査させたりと、満洲国による非常に厳しい統制が行なわれていたこともわかる。卒業後の就職先も国によって決められ、官費での日本留学は、「満洲国」の繁栄の礎となる人員を合理的に育成する装置としての機能を果たしていたと言える。また日満帝国婦人会と奈良女高師との関係が分かる公文書も数多く残されている。日満帝国婦人会から奈良女高師に対し、留学生の受け入れ打診をしていることから推測するに、日満帝国婦人会と奈良女高師には何らかのネットワークがあったようだ。

●**「会議録」の教官会議録**からも、満洲国との強いつながりが見て取れる。奈良女高師では、養成した教員を満洲国へ派遣することに力を入れており、日本人学生の中国東北部への修学旅行も積極的に進めていた。一方で、満洲国からも莫大な寄付金を受け取り、満洲国の留学生のための寄宿舎を作ろうとしていた。留学生受け入れについては、満洲国と奈良女高師の相互の思惑が一致して、大量の受け入れ体制を整えたと推測される。満洲国との提携は、日本の侵略の一環として批判される向きもあろうが、そこからは国策に則りながら、教え子たちの進路を探り、学校の発展を図ろうとした、奈良女高師の努力の一端も感じられるのではないだろうか。

（杉本史子、磯部香、羽田朝子）

## 帰国留学生ヒヤリング調査 松岡悦子・野村鮎子 ―― プロジェクト研究

この帰国留学生を対象としたヒヤリング調査は、本センターの重点プロジェクト研究の一環として、平成21年度から始まったものである。前号では平成21年度に実施した計4名のうち３名についての報告を掲載したが、今号では21年12月に実施した「満洲国」留学生1名と、22年12月に実施した「満洲国」留学生2名へのヒヤリング調査について報告する。

### ● 郭以明さん（1921年生まれ、第33期文科卒業生）

郭さんは1939年に官費留学生として奈良女子高等師範学校の予科に入り、翌年本科に入学した。留学したのは、日本の教育の方が中国東北部よりずっと先進的だと思ったからで、奉天女子師範学校を卒業して留学試験を受け、当時有名だった奈良女高師を選んだ。専攻は文科の地歴だった。郭さんは5つの寮のうち5の3にいた。上級生が下級生を「うちの子」と呼んで、食後の散歩や土日の遊びに連れて行ってくれ、まるで家族のようだった。食事は材料をメモして廊下の竹のかごの中に入れておくと、毎朝八百屋や肉屋が来てメモを見て品物を入れておいてくれた。料理は同じ部屋の学生で順番に作ったが、中国料理、日本料理の区別を意識しないですむぐらい郭さんは寮の生活にすんなり適応した。

1944年10月に卒業してすぐに帰国し、出身校である奉天女子高等学校の教師になり、歴史を教えた。1946年に結婚し、娘4人息子1人が生まれた。1962年に夫の仕事の都合で大連に移り、1964年から1987年まで大連日本語専門学校(現在の大連外国語大学日本語学院)で日本語を教えた。子育てについてはそんなに苦労しなかったそうだ。最初の3人の子どもたちは3才頃まで育てた後は北京の実家に預けたが、その理由は北京の方が教育レベルが高いことと、郭さん自身が忙しいという理由からのようだ。四女と長男はずっと自分で育てたが、夫も姑も育児を手伝ってくれたし、お手伝いさんには食事を作ってもらった。それでも自分の子どもより学生のことを優先に考えていたので、買い物に行く時間がないほど忙しかった。

奈良女高師に留学して良かったことはと尋ねると、日本語を習得してそれを職業にできたことと、仲の良い友達がたくさんできて人生が豊かになったことだと答えた。1987年には寮の同窓会に参加し、日本人の友人と旧交を温めたとのことである。（記録：松岡悦子）

### ● 高素威さん（1924年生まれ、第34期文科卒業生）

高さんは1941年４月大連から奈良女高師の予科に留学。翌年文科に進学し、1945年９月に卒業。本学の校史資料によれば、「満洲国」民生部から奨学金が支給される官費留学生であった。1979年に55歳で南開大学基建処を定年退職し、現在は南開大学の宿舎で一人暮らし。

高さんは奈良女高師の最後の卒業生である。この学年は、学徒勤労令により第３学年の11月９日から翌年７月29日の帰還まで舞鶴海軍工廠に出動したが、留学生は寄宿舎内に留めおかれた。高さんによれば、その間授業はなくなり、食べ物が入手困難になり、リュックを担いで法隆寺の方へ柿を譲ってもらいに行ったこともあったという。大学はすでに昭和17年度卒業生から修業年限が６ヶ月短縮されていて、高さんは９月の卒業の予定であったが、早めに帰国してもいいと言われ、終戦直前の６月か７月に帰国したとのこと。

帰国後は、国民党天津市党部の民運科や天津の財務局で働き、名古屋高等工業学校の土木科に留学していた男性と結婚。しかし、1949年の１月15日に共産党軍が天津を解放すると職を失い、その後の政治変動の中で、留学の経験や国民党組織に勤めた経歴から「日本のスパイ」と批判されることになり、33歳のとき夫に先立たれた、苦労して二男二女を育て上げた。

高さんは、留学のきっかけは修学旅行で訪れた奈良で鹿を見て奈良が好きになったこと、大連の女学校で奈良女高師を卒業した女性教員に教わったことなどを懐かしそうに語ってくれた。（記録：野村鮎子）

### ● Aさん（匿名希望、1921年生まれ、第31期理科卒業生）

Ａさんは1938年４月長春（当時の新京）から奈良女高師の予科に留学。翌年理科に進学し、1942年９月に卒業。本学の校史資料によれば、「満洲国」民生部から奨学金が支給される官費留学生であった。卒業後は某文理科大学の化学科に入学、帰国後は某研究所や某大学に勤務。理系研究者として実績をあげ、中国の発展に寄与。私生活面では、同じく日本に留学していた男性と結婚し、三人の男の子の母となった。夫の死後はお手伝いさんと暮らす。現在89歳であるが、今も学術界の重鎮として活躍。

文化大革命で「日本のスパイ」扱いされたＡさんは、現在でも「満洲国」については一切公表されたくないとのことで、匿名での報告となった。（記録：野村鮎子）

# 2010年度のセンターの活動

## ■センター主催のシンポジウム・講演会・研究会

●展覧会「身体の記憶とテキスタイル―身体経験をまなざすこと／身体と向き合うこと―」
期間：2010年7月8日(木)～7月15日(木)　9:00～16:00
会場：奈良女子大学記念館

●アーティスト・トークセッション
日時：2010年7月9日(金)　10:40～12:10
場所：奈良女子大学記念館講堂
石垣陽子（アーティスト）×山崎明子（奈良女子大学助教）

●講演会「性の多様性を考える」
日時：2010年7月23日(金)　10:40～12:10
場所：奈良女子大学G201
講師：塩安九十九・森さやか

●第１回帰国留学生調査研究会「『満洲国』と奈良女高師」
日時：2010年７月23日（金）　15:00～18:00
場所：奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター
講師：周一川（日本大学理工学部准教授）「『満洲国』と奈良女高師」
調査報告：杉本史子（立命館大学非常勤）「教官会議議事録について」
羽田朝子（センター助教）「中華民国及び『満洲国』留学生名簿、特設予科修学旅行に関する調査」
磯部香（奈良女子大学博士研究員）「『満洲国』留学生に関する奈良女子高等師範学校に残存する公文書調査」

●特別展示
「着物にみる近代日本の戦争～乾淑子コレクションより～」
期間：2010年10月31日（日）～11月7日（日）　9:00～16:00
場所：奈良女子大学記念館
共催：奈良女子大学記念館運営委員会（一般公開）

●記念講演
日時：2010年10月31日（日）　14:00～15:30
場所：奈良女子大学記念館講堂
講師：乾淑子（東海大学教授）「着物にみる女こどもの戦争」

●第２回帰国留学生調査研究会「奈良女高師の留学生と『満洲国』」
日時：2010年10月31日（日）　16:30～18:00
場所：奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター
講師：游鑑明（台湾中央研究院近代史研究所研究員）
「台湾帰国女子留学生の『満洲』経験」
調査報告：杉本史子・羽田朝子・磯部香
「『満洲国』留学生と奈良女高師－校史資料が語るもの」

●講演会
日時：2010年12月6日（月）　14:40～16:10
場所：奈良女子大学文学部N202
講師：衣若芬（シンガポール南洋理工大学中国文学科副教授）
「絵の中の宮怨――南宋の牟益「擣衣図」とその題跋」

●文学部言語文化学科ジェンダー言語文化学プロジェクト
第４回シンポジウム「女どうし／男どうし―文学に見る同性関係―」
日時：2010年12月8日（水）　14:40～16:30
場所：奈良女子大学総合研究棟Ｄ012講義室
報告：高岡尚子（奈良女子大学准教授）
「ホモソーシャルなあり方―19世紀フランスの場合」
吉川佳英子（京都造形芸術大学准教授）
「20世紀フランス文学にみる「性」の曖昧―プルーストやコレットなど」
共催：ジェンダー言語文化学プロジェクト

●第３回帰国留学生調査研究会
日時：2011年1月28日（金）　14:40～17:00
場所：奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター
講師：野村鮎子（奈良女子大学教授）「H22年度帰国留学生ヒヤリング調査報告」
調査報告：　羽田朝子（センター助教）「奈良女高師留学生の卒業後の進学状況について」

●公開研究会
日時：2011年2月12日（土）　14:00～17:00
場所：奈良女子大学文学部　S311
講師：シャロン・ボング（モナッシュ大学マレーシア校上級講師）
「マレーシアにおける女性の権利と宗教」

## ■センター共催のシンポジウム・講演会

●公開講座「女子大学と女性論」
日時：2010年12月11日（土）　14:00～17:00
場所：奈良女子大学文学部　N101
講演：田村俶（元奈良女子大学学長）「青丹よし奈良の都は：地名詩歌の今昔」
本田和子（元お茶の水女子大学学長）「花盛りの少女文学と女学生の系譜」
主催：奈良女子大学生涯学習教育研究センター

●シンポジウム「社会運動で語ること／伝わること／繋がること
―関西在日・部落問題にかかわるトランスジェンダー＜土肥いつき＞との対話」
日時：2010年1月9日（土）　13:00～
場所：奈良女子大学文学部　N101
講演：土肥いつき（京都府立高校教員）「「ありのままの私を生きる」ために――セクシュアリティをとおして自分自身と出会い直しませんか？」
主催：奈良女子大学＜関西の社会運動を考えるシンポジウム＞実行委員会（代表：鶴田幸恵）

## ■調査

●プロジェクト研究「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査Ⅱ」
●学生の進路選択に関するジェンダー意識
●大学の女性教員数の変動

### 組織

センター長：野村鮎子（文学部）
運営委員：高岡尚子（文学部）、松岡悦子（生活環境学部）、安田恵子（理学部）
メンバー：内田忠賢（大学院人間文化研究科）、大平幸代（文学部）、鈴木則子（生活環境学部）、鶴田幸恵（大学院人間文化研究科）、中川千帆（大学院人間文化研究科）
松岡由貴（理学部）、山崎明子（生活環境学部）、吉田容子（文学部）
特任教員：羽田朝子
協力研究員：周一川（日本大学）、ライラ・ママティ（新疆大学）、竹田治美（奈良産業大学）
事務担当：研究協力課
連絡先：奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター
〒630-8506　奈良市北魚屋東町 TEL：0742-20-3611　FAX：0742-20-3612
E-mail：a-gender.c@cc.nara-wu.ac.jp

### 編集後記

本センターでは昨年度から専用室が開設され、今年度から特任助教が専用室に常駐するようになりました。活動の環境が整ったこともあり、今年度のセンターの活動は今まで以上に活発でした。ニュースレター10号ではこれらの活動をお伝えします。組織も新たになり、メンバーはますます意気盛んです。今後とも温かいご支援をお願いいたします。（羽田朝子）